



スウェーデンの歴史の香り

中西 友子

Tomoko M. Nakanishi

筆者は何回かスウェーデンを訪れる機会があったが、今回、そのスウェーデンのヨーテボリ物理センターからリーゼ・マイトナー賞をいただいたこともあり、スウェーデンで感じた歴史の香りについて書いてみたい。

ナポレオン戦争後の近年のスウェーデンは大きな戦争もなく文化の礎が築かれてきた。その気風の一つがノーベル賞でもあるように、スウェーデンにはとてつもない財産を築いた人たちがいる。例えば、かつて東インド会社で大きな富を得た、ウィリアム・チャルマーズである。彼には子供がいなかったため、その莫大な財産で病院と大学を建てた。その大学が今日スウェーデンの代表的な工科大学として知られているチャルマーズ工科大学である。そのため、大学自体の建物や設備の他ウィリアム・チャルマーズが居住していた館が今でも大学の要人を迎えるための場所として使用されている。建物の中には、かつて活躍した人々の肖像画が飾られ、食事を用意する専門のシェフが雇用されている。出される料理はこのシェフの考えに沿ったもので、食卓に並べた後に、ひとこと蘊蓄があってから食することとなる。チャルマーズ工科大学だけでなく、ストックホルムにあるスウェーデン王立工科大学（KTH）にも古いファカルティハウスがあり（写真1）、中は同様に昔のままの装飾が施され、料理の専門家もいる。

かつての人の暮らしあはともかく、現在の人々はどのように暮らしているのだろうか。長年、国王が主催するアカデミーの事務局長をしていた人のお宅に行く機会があったが、マンションの1室だと伺い訪ねていったところ、石で作られた非常に大きな古いビルで、中の一軒一軒がとても広い。まず建物の



写真1 KTH ファカルティハウス

奥の部屋は打合せ部屋で青く映っているのは KTH のマーク

中に入ると大理石でできた扇状の階段があり、その途中に天井まで届くような大きな木の扉に目指す部屋の人の名前が書いてある。扉の反対側の廊下にはワイヤーで作られた鳥かごのようなエレベータが備え付けられていた。部屋に入ると、壁には大きな油絵がたくさん掛けっていて、1番大きいものは自分の祖先でグスタフ3世に仕えていた軍人だと説明を受けた。丁度お昼時だったので、料理の用意にはシェフが雇われていた。15人ほどが座る大きなテーブルにはコーヒーカップから料理の取り皿、真ん中には料理が入った鉢等大小様々な形の陶器がところ狭しと並んでいたが、すべて同じ花柄だった。真っ白な陶器であるが、マリーアントワネットが好んで使っていたという骨董品なのである。欠けた陶器の補充のため中国に大量に発注したそうだ。ここでふっと日本でももしも戦争が無かったら、焼き物や漆器等のセットが今でも大量に残っていて、人が集まるときに好まれて使われているのかもしれないと感じた。

ストックホルムにあるスウェーデンの王宮也非常に古いものを大切に保管し、現役の建物として使っている。国王は毎日この王宮に車を運転して来られ仕事を行っている。国王だけが王宮の広い中庭に駐車できるので、国王の車（ボルボ）が止まっている



写真2 王宮の執務室
正面の机の上に小さな瓶が並んでいる

間は国王が仕事を行っている最中とのことである。中庭に面して広い廊下が取り囲んでいるが、ところどころに若い守衛さんが大理石の箱型の中に立っている。そのうちのひとりは KTH で物理の研究をしている大学院生だった。今の王妃になって初めて王妃が王宮で仕事を行うこととなり、周囲の人は驚いたとのことであるが、まず、タイプライターを要求されたそうである。

長年国王の開く会議の議長をしていたという初代ノーベル博物館館長の執務室（写真2）には、机の上に小さな瓶が3つ並んでいた。ふたつは羽ペンとそのインク入れである。3つ目には砂が入っていた。紙が濡れていることがあるので、まず砂を紙の上に出して広げ、湿気をとるそうである。そしてその紙の上に羽ペンで、大切な人への招待状等、文章を書く。かつて王宮で政治を行っていた際の議事録もこのようにして書かれ、かつ質のよい紙が選ばれ



写真3 国王の印

た。王宮には長年の議事録が太いバインダーに整理され、年代ごとに並んでいる。その中を開けると、たとえ100年前の議事録でも、真っ白な紙に際立つインクの色で書かれたペンマンシップのような美しい斜体の文章に息をのむ。それも4~5行でだんだん薄くなり、そこでまた墨を付け直したのだろう、また濃い文字となって並んでいる。執務室の机の中には何枚もの紙があり蟻が固まっていた。今でも大切な手紙、特に結婚や出産等の慶事に出す手紙の封印は蟻で行い、その真ん中に国王の印を押す（写真3）。きちんとした押印の形態を作る作業は結構大変とのことで、机の中には、蟻の封印の練習用に使っている紙がたくさん残っていた。

日本ではもう、古いもの、古くてよいものを身近に見かける機会は大都会では珍しい。スウェーデンで、昔からの習慣や物が実際に生きているような歴史の香りを感じた次第である。

（東京大学名誉教授・特任教授 / 星薬科大学名誉教授 / 福島国際研究教育機構監事）